

平成24年度大阪市博物館協会外部評価【シート1・2】委員総括コメントへの措置状況(自然史博物館)

		指摘事項	措置状況
【シート1】 運営状況 (総括)		①職員総数減による現場での支障を危惧。日本の博物館界にとってモデルとなる実績をあげてきた館の基盤が崩壊しないよう経営資源の確保を。	①経営資源として最重要なのは、職員、支援者の人的資源であり、蓄積された標本、醸成された活動様式と考えている。ICOMなどの国際基準などに照らした議論を展開しつつ、館内外の建設的な議論を集約して日本の博物館界の議論として館の未来像を作っていくことを検討する。(ICOM加盟を申請)
【シート2】 各館・所の特徴	「館の強み」の認識	①隣接する植物園がBotanical Garden, Natural History Gardenとしての機能も備えるよう、関係機関と連携して主導的役割を担ってほしい。	①それぞれが独立した経営母体を持つ施設であるために、直接の措置は困難ではあるが、定期的に連絡会議を開催して連携を図っている。「開館・開園40周年記念事業」として特別展「恐竜戦国時代の覇者トリケラトプス」に関連した記念展示「恐竜戦国時代の餌」を共同開催し、植物園内、公園内に植栽されている植物からみた「植物の進化」を展示・解説した。
	「館の弱み」の認識	①大阪府下唯一の大規模自然史系博物館として、小規模地方館とはちがったスタンスによる新たな研究成果を取り入れた常設展示を。 ②予算を確保し施設の老朽化対策と展示リニューアルを。子どもの学習支援の面もふくめ、最新の知見をとり入れた展示に早急に更新することが必要。 ③新展示の基本構想の検討を始め、設置者だけでなく市民に対してもアピールして理解を求めることが必要。	①大規模な展示更新の必要性は強く認識しているが、現時点では実現の目途はない。組織的にはこの間、平成9年度に作成した展示更新実施設計を元に、リニューアルプランの再構成などに取り組んでいる。 ②科研費による研究成果をプレスリリースするとともに、関連標本をミニ展示として常設展内で紹介した。 ③緊急補修が必要な施設・設備改修を順位をつけて予算要求し、改修を進めている。
	「環境の変化」の認識	①競争的資金を獲得できるように引き続き努力することを期待。競争的資金で措置されないものについては、施設設置者(大阪市)からの資金提供が必要。 ②NPOや市民団体との連携を更に発展させ、年齢を問わず理科好きの人たちの居場所として期待に応えてほしい。	①25年度は新規採択2件を含めて9件の科研費(基盤A1件、B1件、C4件、若手B3件)、民間の研究助成2件、特別展の展示物作製に1件、合計2,364万円の外部資金を獲得して活動した。(26年度は民間含めて16件、2,780万円) ②25年度の友の会会員は1723名、NPOと共催した「大阪バードフェスティバル2013」には2日間で17,000名が来場するなど多彩な普及教育事業を開催した。これら普及教育事業は218回開催し、参加者総数は30,527名。関係する研究サークルの協力は資料収集保管にも貢献している。
	指定管理期間の成果	①広報と集客には、更なる努力を期待。	①25年度主催展「いきものいっぱい!大阪湾」では、過去数年のアンケート結果や入館者動向を分析し、対策を検討した。いわゆる「地域調査特別展」の弱点を分析し、展示がおもしろそうと感ぜられるタイトル、ポスターデザイン、「目玉展示」としてのマッコウクジラ全身骨格を使った広報展開などを工夫した。大和川展、淀川展を比較して2倍の2万人が来場した。
	今後の課題	①経験を積んだスタッフが次代を担う人たちに技術を傳承し、博物館学芸員を主とする研究スタッフの成果を市民に還元するためには、スタッフの拡充と待遇改善は欠かせない。	①25年4月に、協会契約職員として学芸員(脊椎動物化石担当)1名を採用した。待遇改善は今後の課題である。

事業区分	指摘事項	措置状況
1 資料の収集、保存、活用	①収集標本の保全環境と収蔵スペースの不足について、施設設置者(大阪市)に伝え早急な改善を。 ②標本資料のデジタル化の進行について、早急に検討を。 ③増加が予想される外来研究員の研究スペースや機材の不足について、施設設置者(大阪市)に必要性の周知を。 ④アマチュア層が資料にアクセスできる制度の検討を。	①収蔵スペースの不足は限界に近く、優先順位の低い一部の標本は旧収蔵庫に仮収蔵している。 ②まずは既存デジタルデータの統合による提供を優先。GBIF、サイエンスミュージアムネットなどを通じた専門家向け提供とともに、一般向けコンテンツも検討中である。一例としては本郷次雄菌類図譜コレクションの公開を予定。 ③外来研究員には、外来研究室だけでなく、平日などは実習室、第二実習室などを研究スペースとして適宜利用してもらっている。弾力運用で対応。 ④アマチュアは資料を収集する上でも重要な存在。今年度から標本作製の講座なども予定しており、標本の利用リテラシーの向上を図りながら検討。高いリテラシーを持つアマチュアは現在も十分アクセスしている。
2 調査・研究	①26年度の特別展の開催に向け、計画的な調査とともににより市民を巻き込む工夫を。 ②今後の外部資金獲得につながるよう博物館全体で研究時間確保の努力を。	①各研究班の研修として観察会や実習を13回実施し、延べ203名が参加し、その後の調査につなげた。特別展開催までに、各班でのまとめ、合同の発表会、展示作製などを実施予定である。 ②研究時間の確保は重要な課題と認識している。特に若手学芸員は調査のための出張と他業務のバランスに注意している。中堅以上では観察会の下見と調査を兼ねるなど工夫しながら、実施している。
3 展示 (常設展示、特別展)、 来館者サービス	①今後も実物資料をふんだんに見せる展示の継続を、 ②ミニ企画展、パネル展など、今後、広報・周知の効果的な実施を。	①展示の基本として、実物資料の展示というコンセプトを変える予定はない。 ②規模の小さな展示でもプレスリリースを欠かさないようにしており、ミニ展示「270万年前に出現したクロマツ〜日本列島に生育するクロマツの起源を解明〜」では主要紙にトピックが取り上げられるなど成果があった。
4 教育普及、学習支援、友の会、ボランティア	①今後も普及事業の継続を。市民参加型調査の実施の留意点などをまとめ、他館への情報発信を期待。	①25年度実績としては、普及教育事業は218回開催し、参加者総数は30,527名。26年度も同程度の開催予定であるが、全体の事業実施の中でバランスも必要と認識している。市民参加型調査の実施は26年度に3回目終了するため、次回に向けての事業評価の中で留意点も抽出できると考えている。
5 学校等との利用促進、学校教育支援	①学校連携の取組について、今後も継続を。	①従来からの取組みに加えて、「教員のための博物館の日」の実施や、外部資金により「ボーリングコアを貸し出し標本として運用」、「理科以外の教科での自然史博物館利用のツール開発」などに取り組んでいる。
6 広報・宣伝、情報公開と発信	①時代の変化に応じた広報手段での情報発信について、今後も継続を。協会での情報交換し、他館でも可能なものは導入を。 ②地下鉄内広報について、今後も継続実施を。	①HP掲載の新着情報を中心に「Twitter」、「Face Book」を通じて情報提供するなどしている。また特別展の内覧会にはブロガーを招待し、市民参加型の広報を実施した。 ②経費を捻出して、継続して実施している。
7 地域、市民、関連機関との連携・交流	①今後も、様々な分野で機関・団体・市民と連携した調査・研究活動の展開を。	①26年夏の特別展「ネコと見つける都市の自然」に置いて4年間かけて市民とともに調査した都市の自然の成果を展示する。また、今後も「アカハネオンプバッタ」の調査や市民参加による骨格標本作成など、科学研究費によるプロジェクトとも連動した活動が設定されている。科研費などの共同研究は従来から実施。
8 施設の整備、維持管理、リスクマネジメント	①中小規模の補修と改修で対応できるものとそれ以外の仕分けを点検し、優先順位をつけ対策を。施設の状態を施設設置者(大阪市)に定期的に報告し、早急な改修を。	①25年度には、本館屋上防水工事(第2展示室屋上)、本館外壁補修、本館管理棟エレベーター更新、収蔵庫系統空調チラー3方弁取替工事を実施。必要な補修工事については緊急性・必要性により大阪市内に要望している。

<p>9 運営・マネジメント</p>	<p>①大阪市役所のシンクタンク機能を果たしていること等、社会貢献について積極的に広報、アピールを。府・市・堺市などと共同した生物多様性施策の実現の後押しを期待。</p>	<p>①大阪府・市・堺市と連携し、大阪自然史センターなどNPOとも協働して「大阪生物多様性保全ネットワーク」を設立、大阪府レッドリスト作成に館として貢献するとともに、堺市、奈良県などのレッドリストにも情報・知見を提供している。</p>
<p>10 a ※各館の特性がでるよう、この項目を活用する。</p>	<p>①標本レスキュー等の活動など、今回の震災の教訓や成果について自館の災害対策にも反映を。</p>	<p>①26年9月に国際生物学連合が仙台で開催するシンポジウム「自然災害と生物多様性」に佐久間学芸員をコーディネーターとして派遣、海外事例との交流を模索。またICOM NATHISTにも加盟申請中。</p>